

ある晴れた日に

空瀧 聿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人間と妖がともに暮らし、生きる世界で、人と妖が出会い、人と人が出会い、妖と妖
が出会う。とあるところで出会った人たちや妖たちの、とある話。

ゆっくり更新していくうと思います。目標は半年1回の更新です。よろしくお願ひ
します。

目

次

ある日の童話専門書店

引っ越しの日のふたり

ある日の文屋

床に伏せる鬼

雨の前の童話専門書店

郷からの便り

62 50 41 28 16 1

ある日の童話専門書店

古い町のあるところに、古びた書店がある。ただの書店ではない。童話を専門に取り扱っている、童話専門書店だ。その店には絵本を始め、多くの古書が並んでいる。しかし、それを手に取る客が大勢いるかと問われると、そうではないと言うしかないのが実情だ。

古い看板が掲げられたその店が繁盛している雰囲気はない。人の出入りは激しくないどころか、人が出入りしているほうが珍しいくらいだ。

古い店はうつかりすると見逃してしまいそうなほど、周りの民家と同化してしまっている。店らしい雰囲気が醸し出しているようなことは一切ない。看板があるだけで普通に門が構えてあるし、門から店の入り口までには小さな庭があり、門の外から店の中の様子を窺うことはできない。店に本がずらりと並んでいることなんてここから先も予想することはできないのだ。門からは店の入り口である引き戸が見えるだけなのである。

古い構えの店の門を叩くには、そこが店であることをあらかじめ認識している必要がある。ちょっとした気分で立ち寄ることのできる店ではない。店が繁盛していないの

は、そのせいもあると思われる。

しかし、その古びた店に人が全く立ち入っていないわけではない。ぽつりぽつり、訪れる客はいるのだ。たとえばそれは童話を専門に扱う学者であったり、学生であったり、あるいは古書好きであったり、童話好きであったり、はたまた店主の友人であったりと様々だ。少なくともその道の人々にはその店はよく知られているようで、たまにその店を訪れては幾つか本を買っていくことがある。

そのたまに訪れる客たちが長居することは滅多にない。目的の本を買ってしまえば店を出て行ってしまう、そのような客が多い。しかし、例外として長居をしていく人物もいる。たとえば、外套を身にまとつた、出生も住居もよく分からぬ呪術師の女であるとか。

「店主さん、こんにちはー」

「あ、あきら 晓空さん」

その暁空という女性に声を掛けられて、やつと店主は顔をあげた。それまで本を読んでいた店主は、読みかけの古い本を自分の傍に置いた。

「今日はどうしたんですか？ お仕事は？」

「今終わってきたとこ。今日は簡単なやつだつたからねー」

「呪術にも簡単なものとそうでないものがあるんですか？」

「そりやあ。本だつて幼児が読みやすいものから大人が読んでも難しいものまであるでしょ？ それと同じだよ」

「分かるようで分からぬ例えですね」

「ええ？ だからつまり」

「いや、言いたいことは分かるんですけど」

「ねえ、せめて最後まで言わせてよ」

「いやいやいや……」

暁空の言い分を遮り、店主は適当にその場を濁した。

暁空は外套をひらりと振ると、店主の小机の横に腰をかけた。店主の方へ振り返るような感じのところに暁空は座る位置を定める。

「はー、今日もいい天気だね」

「ほんとうに。お洗濯ものがよく乾くので助かります」

「へー、店主さんも洗濯とかするんだ？」

「しますよ、普通に。最近は乾燥まで洗濯機はやつてくれるけど、でもお日様の下で干しあたほうが私は好きです」

「私も私も」

「そういう暁空さんこそお洗濯なさるんですか？」

「そりやあするよ。割と好きだよ」

「へー」

適當な会話。たあいのない会話ともいう。こういう会話の流れは、店主も暁空も嫌いではなかつた。

「店主さんは洗濯自分でするの？ 文多くん？」

「洗うのは私です。干すのは文多さん」

「分けてやつてるの？」

「最初はどちらも私だつたんですけど、文多さんがお手伝いしたいと仰るので」

「ふうん」

文多とは、この古本屋の奥にある店主の家に住んでいる妖のことだ。見た目が四、五歳の白髪の男の子。神狼だという。

「あ、噂をすれば文多くん。ここにちは」

「……」

「あ、お茶くれるの？ ありがとう」

「……」

奥から文多が現れた。文多は、暁空に対して会釈をすると、盆に載せていた湯呑を暁空の近くに置いた。もう一つの湯呑を店主の小机に置く。

「ありがとう、文多さん」

店主が言うと、文多は店主にも慌てて会釈をして盆を抱えて俯いた。

「そういえば、今日はまれさんは？」

「あー、表の本読んでるって今表に。呼んでこようか？」

暁空は本屋のほうを気にしつつ文多を見やつた。文多は静かに小さく頷いた。
「ちよつと呼んでくる」

そう言つて暁空は立ち上がり、本棚の間を通り抜け、一人の女の子を連れてまた店主
のところへと戻ってきた。

「こんにちは、まれさん」

「こんにちは、店主さん、文多くん」

「……」

挨拶をした女の子に対し文多はまた会釈をする。

「ねー空ちゃん、いつ帰る？」

「えーっと、小一時間はここにいるかなあ。また呼ぶよ」

「はーい。行こう、ぶんちゃん」

女の子は靴を脱いで家へと上ると、文多と一緒に襖の奥へ入つていった。

「ここは託児所じゃないんですけど」

「まーまー、まれも文多くんも楽しそうだからいいじゃない」
「それはそうですけど」

「まれ」は、暁空の連れている妖である。暁空の持つている宝石の付喪神で、女兒の姿をしているが、見た目は文多より幾分か大きい。文多が五歳前後だとすると、まれは八歳前後くらいだろうか。とにかく、まれは文多よりお姉さんらしく見える。

「それで、お目当てのものはありました？」

店主は尋ねる。暁空は難しく考えるような顔をしてから、ため息とともにぱつとその緊張を解いてみせた。

「全然。これだけ本が集まつてきてるのに、一冊も見つからない」

「そうですか」

お茶を飲みながら店主も小さくため息をついた。それに伴つて湯呑の中のお茶も小さく揺れる。

「暁空さんがここに来るようになつてから、もう一年ですっけ？」

「そうだね。そのくらい」

「もうそろそろここに並んでるものは全て読んじやつたんじや？」

「そうだねー。全部じやないけど」

暁空の相槌。

暁空は、ほとんど毎日のようにこの古びた童話専門書店を訪れている。そして、本棚の隅から順に、並べられている童話を立ち読みしているのだ。

「でも、ないんですか？」

「そう。ないの」

ため息混じりの声。暁空はゆっくりとお茶を啜る。

暁空には探している本があった。それは、暁空がずっと幼いころに親に読み聞かせてもらつた本だつた。しかし、残念ながら店主もその本を知らなかつた。店主は、この本棚の中にはない本だと思つてゐる。

「だからないと思うつて言つたじゃないですか」

一年前、暁空が初めてこの店にやつてきたときも店主は「うちで扱つている商品の中にはないと思う」ときつぱり言つていた。しかし、「それでも」と言つて探し続けているのは暁空だつた。

「でもさ、私が覚えている内容が本当かどうかは定かじゃないし。実は思い違ひつてこともありえるかもだし。見たらそれだーつて思いだすかもしれないから」

「その一冊がこの中に紛れこんでいるかもしれないって？」

「そういうこと。本当の話が見つかれば、店主さんもあーそれだつたかーつてなるかもね」

「そうですね」

「それに、まだないと決まつたわけじゃないから」

そう言いながら暁空は本棚を見やる。

「もう残り数冊なんじゃないんですか？」

「そうでもないよ。まだ結構ある」

「そうですか」

幾つ目か分からぬ相槌を店主が打つたとき、誰かが本屋に入つてくる音がした。その音に店主も呪術師も敏感に反応し、音のするほうをじつと見つめた。

すると、茶髪のおかつぱ頭の女性と蔓帯紋の羽織を着た女性が店主たちのほうに歩んできているのが見えた。店主と暁空の前におかつぱ頭の女性が立つたとき、相手に伝わるほどの小さな声で店主が「いらつしやいませ」と言つた。

「あの、すみません」

その女性は一瞬店主を目で捉えた後、辺りをきょろきょろと見回してから店主に尋ねた。

「失礼ですが、ここには妖が？」

「え？」

おかげば頭の女性の質問に店主が質問で返す。おかげば頭の女性の質問を聞き取れ

なかつたのではない。彼女の質問を聞き間違えたかと思つたからだ。

しかし、その質問は聞き間違えではなかつた。おかつぱ頭の女性の後ろにいた灰色の髪をした蔓帯紋の羽織を着た女性が改めて店主に尋ねてきたのだ。

「こちらに妖がおいでかと聞いておるのじや。答えよ」

「……」

「どうした、申せ」

「……」

蔓帯紋の羽織を着た女性は立つたまま上から店主を見つめた。店主は座つたまま下から見つめ、沈黙を続ける。

「おい、店主よ。何がそんなに気に入らぬ、わしらはここに妖がおるかおらぬか聞いておるだけじや」

「……」

「その質問が不愉快だつて言つてるんですけど」

「何?」

依然黙つたままの店主の代わりに暁空が答えた。

「本屋に来ておいていきなり妖がいるかいないか尋ねるなんて、失礼にも程があるでしよう。最近は妖を嗜みの一種とする輩も増えてますからね、そんなの、ここに妖がい

てもいなくても、あなたたちを妖売りだと疑つて警戒しても不思議じやないでしょ
う？」

「なるほど」

蔓帯紋の女性が頷く。そして再び口を開いた。

「確かに。わしらのことと言わずしてそなたらのことを教えてはくれまい。失礼した。
わしは汰之朝栄水分神たのあさはるのみくまりのかみ。汰の川一帯を治めておる龍神じや。こいつは人間のおかつ
ば」

「あの、最近越してきたんですけど、歩いてたら妖気を感じて、それで。特に質問に深い
意味はなかつたんですけど……」

蔓帯紋の女性の後に続いておかつぱが言つた。おかつぱの言葉に店主と暁空はほつ
と胸を撫で下ろした。

「そうだつたんですね」

「はい」

「あの、失礼ですがご職業は？」

「あ、ああ、陰陽師です、一応。あと、副業で在宅の仕事を幾つかしてゐんですけど
「へえ、そうなんですか」

「店主、そんなに心配せずとも、わしらは妖売りとは通じておらん。安心なされよ」

「あ、いやあ、すみません」

「ま、突然こんな風に現れては疑うなと言うのもあれだがな」

「まあ、はい」

ははははつと声をあげて笑つている蔓帯紋の龍神にぼそぼそと店主が返す。そうは言
われても、店主も暁空も突如現れた龍神とおかっぱが怪しいものではないということを信
信じることができないでいた。

結局、二人が本当に妖売りに関係のないただのこの辺りに住む住人だということを信
じたのは、三十分ほど四人で話してからだつた。

「へえ、じやあおかげさんは各地を旅して回つていると」

「まあ、そんなとこかな。朝栄の行くとこ行くとこについていつてるだけなんだけど
「へー、そうなんだ。えーっと、朝栄さんは何してるんですか?」

「わしか? まあ、時と場合によるが、大抵は雨降らしじやな」

「へえ、雨降らし」

「そうじや。祈る民の元を訪れ、その願いを聞き、力を貸す。それがわしの役目じや」

自信ありげに龍神が深く頷く。

「それで朝栄が行つたところに住んでる妖に挨拶するつて決めてるんだけど、結局ここ
に妖はいるの? というかいるよね?」

「なんでそんなに断定的なの？」

「いや、分かるから……」

「分かるからって……」

龍神と同じように自信ありげに言つてみせるおかげで、曉空は苦笑を浮かべる。曉空の向かい側で同じように店主も一人のやり取りを見て笑う。

「鼻がいいんじゃないんですか？」

店主が言つた。それに「いかにも」と龍神が答える。

「こやつの鼻は驚くほどにいい。その場所に行けば必ずそこに長く住む妖に会うことができる。それが間違いだつたことはない。わしとて妖の気を感じることはできるが、こやつの鼻には負けるな」

「だからかー」

龍神の説明を受けて曉空が納得した。そして、それと同時に襖の開く音がする。

「ねーねー、なんだか騒がしいんだけど、つてお客様？」

現れたのはまれだつた。その後ろで文多も控えめにつつ立つていて、二人の姿を見て龍神とおかっぱが立ち上がり、二人に対して一礼をした。

「お初にお目にかかります、汰之朝栄水分神と申します。雨降らしの儀式により朝栄村より参上しました。以後お見知りおきを」

「……」

龍神の言葉に、文多も正座をして深々と一礼を返した。おまけのようにして、まれも文多の隣に正座をし、続けて頭を下げる。

「これからそなたの住む土地を荒らしてしまったやもしれぬ。予め謝つておこう」

「……」

「すまぬな」

「……」

文多は二回とも首を横に振った。龍神は優しい微笑みを浮かべ文多と一、三秒見つめ合ふと、店主と暁空のほうを向いて挨拶をした。

「会いたい妖に会うことができた。感謝する。店主、あの神狼を大切にしてやれ」「分かつています」

「うむ。じゃあ、今日はお暇するとしよう」

「え、もうちよつといいじやん」

「馬鹿を言え。今日は家の片付けもせねばならん。早う帰るぞ」

「そーうだつたー」

龍神に引つ張られておかっぱが歩き始める。

そして二人は本屋から立ち去つた。

「じゃ、キリがいいから私もお暇しようかな」

「えー、もう帰るのー?」

「うん、帰る帰る。帰りに商店街通つて帰ろ」

「コロッケ買つてくれる?」

「半分こでいいなら」

「けち」

「金欠なんですよー」

「仕方ないなー」

小さな口喧嘩をしながらまれば靴を履く。

「じゃあね、ぶんちゃん」

「……」

手を振るまれに文多は手を振り返す。

そしてまた小さな言い争いをしながら二人は本屋を去つて行つた。

「……」

「……」

店主はつづ立つたままの文多を見上げた。文多も同じように座つたままの店主をじつと見つめている。

「……お茶、ほしいの？」

「……お願いします」

「……僕も飲んでいい？」

「じゃあ、縁側に移動しましようか」

「……お店は？」

「大丈夫でしょ。私、お菓子出しますから」

「……分かつた」

文多は床に転がっている湯呑を手に取ると台所へと向かつた。店主も襖の奥に入り文多の後を追つた。そして文多はお茶を用意し、店主は戸棚からお菓子を用意して縁側へと向かう。

「いい天気ですね」

「……晴れだから」

「そうですね」

縁側からは庭の梅の木が見えた。その枝をちよんちよんと跳ね回っている小鳥の姿も見える。今日は、そんな晴れの日。

引っ越しの日のふたり

新しい土地に越してきた者がいた。

「この辺りはやたらと緑が多いね、朝栄^{あさはる}」

「ああ。この辺は昔とあまり変わつてないからねえ。穏やかでいいところさ」

「ふうん」

おかっぱ頭の女性が相槌を打つと、朝栄と呼ばれたその隣を歩く女性は更に言つた。
「ふた月ばかりお世話になるんだ。しつかりご挨拶しとかないとね」

「うん」

田んぼのあぜ道を歩いていると、ゆつたりとした風が二人の横を通つていった。おかっぱがその風に気を取られていると、田んぼで作業中の老夫婦に声をかけられた。その声におかっぱは笑顔で返す。その隣で朝栄は会釈を返していた。

「あんたら、旅人ね？」

「はい、あちこちを旅して回つてるんです」

「へえ。それはそれは、ご立派なもので。でもつてあんた、陰陽師ね？」

「よ、よくお分かりですね！」

「それ格好見たら分かるさあ。荷物からそんな感じのにおいがする」

「え、もしかして、妖気が分かるんですか？」

「おかっぱが驚き気味に尋ねる。すると老夫婦は笑いながら顔の前で手を振った。

「いやいや、妖気が分かるつてもんじやねえんだけどよ、長年草花とつきあつてると不思議とそんな感じのもんが分かつてくんのかなあ、あんたらがそんな感じのもんを背負つてるつちゅーのがなんとなく分かつた」

「へえ……」

「もしかしたら、自然の神や妖に好かれているのかもしだせんね」

「あー、それは嬉しいねえ。うん、それより嬉しいこたあねえよ」

朝栄の言葉に老夫婦は嬉しそうに笑みを見せる。

「じゃあ、私たちはこれで。先を急ぎますので」

「ああ。こんなどこで呼びとめて悪かった。いい旅を」

「ありがとう」

老夫婦に見送られ、二人はまた歩き出す。もう少しすれば町に入るようだつた。

「いやあ、分かる人には分かるんだね。これが妖に関する道具だつてこと」

「分かるさ。お前だつて、あのご夫妻が妖に好かれていることには気が付いていたんだ

ろう?」

「うん、まあ、それは分かつたけど」

「なら簡単だ。前から言つているように、妖に好かれる人間同士は惹かれやすい。ご夫妻は気が付いておらんかつたが、それでもその妖気の集合体に何か気配を感じ取るのは至極当然のことじや」

「あー、そつかあ」

「ちよつと急ごうか。今日中にこの地の大妖に挨拶を済ませておきたい」

「うん、そうだね」

二人は歩む速度を早歩きにする。今までゆっくりと流れていた景色の移り変わりが少し早くなり、それを楽しむようにおかつぱはきよろきよろ辺りを見回しながら歩いた。

「ねえ朝栄

「なんじや?」

「この地、妖に好かれてるんだね」

「ああ、そうじやな。まあ、自然が豊かな土地だからな。妖にとつても棲みよい地なん

じやろう」

「そうだね」

田んぼのあぜ道を歩いていると、気持ちのいい風が吹いてくるのが分かる。緑がさらさらと揺れ、川が流れてる。時折ぶんと土のにおいをさせ、実際に気持ちのいい土地であることをおかっぱは実感していた。

暫く歩き、田んぼのあぜ道を抜けると、ぽつぽつと民家があつた後に住宅街が見えてきた。その町並みは少し古びたような、どこか懐かしいような感じがした。そして、住宅街に入つた途端に妖気が増すのをおかっぱは感じ取る。

「あ、におうね」

「そうか？ あたしにはまだ分からんなあ」

おかげばは鼻がいい。妖である朝栄よりも鼻がいい。一般的に妖が見える人間は妖気を感じ取れるほど鼻がいいとされているが、おかげばはそれらとは桁違いに鼻がよく、あらゆる妖気をいち早く感じ取る。

「まだまだまつすぐかなあ。町中に入つたところくらいまで行かないといないかも」「ほう」

ずんずんと突き進んでいくおかげばの後ろを、ゆつたりとした足取りで朝栄がついていく。そして町に入つたところで、朝栄も妖気を感じ取つた。

「おかげば、お前の鼻は本当に嘘をつかんな」

クスリと笑いながら朝栄が言う。おかげばは、へへっと自慢げに笑つた。

「確かに、この先に妖がおるようじやな。しかも、この辺りを牛耳つておるようじや」

「ちょっと獸くさいね」

「そうじやな」

「たぬき、きつね、しか……」

「狼、じやな」

「オオカミかー」

その妖が何者であるのか、それに関しては朝栄のほうが詳しい。おかげは鼻はいいが、特に訓練されているわけではないため、妖の種類を言い当てることはまだできない。単に経験の差で、妖の種類当ては朝栄のほうが勝っている。しかし、それをおかげ自身は悔しいとも何とも思っていないようで、おかげは妖の種類を言い当てる朝栄を「すごいなあ」くらいにしか思っていない。

「おそらく神狼の類じやろう。この地で生きた狼が、そのまま神となつたんじやろうな」「ふうん」

「とにかく、失礼のないようにしないとな」

「そうだね」

二人は町の中を歩いていく。町には他の町と同じように商店がずらりと並んでいる。活気に溢れているというわけではないが、人が絶えているわけでもない。これを無理や

り言葉にすると、静かに賑わっている、というところだろうか。そこを歩きながら、二人はどうやらこの町の商店街にあたるところにいることに気がついた。

「商店街なんじやなあ、ここは」

「みたいだね」

「でもここじやない」

「うん」

今はその神狼に挨拶をするのが最優先だ。おかっぱと朝栄は後でまた来ようと約束をし、神狼のにおいを頼りに歩き進めた。

「あ」

「どうした？　ここを曲がるのか？」

「うん」

もう少しで商店街を出てしまうところにあつた横道。そこでおかっぱが歩みを止めた。

「こんな細道じやぞ？」

「でもここだもん」

人ひとり入るくらいの細道。おかっぱは朝栄を先に進ませ、朝栄の背中を押す。朝栄は本当にこの道を通るのかと何度もおかっぱのほうを振り返り、問い合わせながら歩いていつ

た。

そのうちに、朝栄は少し歩くのを速くしたかと思うと、すぐに歩みを止めた。そして、「ここか」と呟くと自身の身だしなみを整えた。それを真似しておかっぱも装いを正す。「おかっぱ、行くぞ。失礼のないようにな」

「分かつてるよ」

相手はここを牛耳る大妖なのだから。万一失礼なんかをすれば、朝栄のここでの仕事ができなくなる可能性だってある。朝栄の仕事をおかっぱが邪魔するわけにはいかない。

「おかっぱ、先に行つてくれるか?」

「分かつた」

朝栄が外門を開け、そこをおかっぱが通つていく。

民家に妖が住んでいると思われるとき、おかっぱが先に行つて話をするのがふたりの間での決まりだ。なぜなら、それは朝栄が龍神だから。人間に妖は見えない。朝栄の力を持つてして姿こそ人間の姿でいるものの、朝栄の力を持つてしても人によつては見えなかつたり声が聞こえなかつたりするのだ。だから、おかっぱがその家人と話していふ間に、その家人が妖を見れる人がどうか確認するのだ。

「あの、すみません」

今回の家は家であるようで店だつた。おかっぱは店の奥にいる店主らしき女性に声をかけた。



「できそ、うだね、雨降らし」

「そうじやな」

帰路、おかっぱと朝栄は会話を交わしながらこのからの住まいに向かつていた。

「それにしても、大妖にしては小さい妖だつたね」

「そうじやな。が、侮つてはいかん。彼は、確かにこの地を牛耳る大妖じや」

「そうなの？」

「そうじや」

朝栄は頷く。それに同意するかのように木々が揺れた。

「何があつてあの姿でおるのか不思議なくらいじやが……まあ、彼がこの地の主であると考えて間違ひはない」

「ふうん……」

あの妖が本当に朝栄の言う大妖であることを信じきれないまま、おかっぱは相槌を打つた。正直に言えば、あの妖が神狼であることすらもおかっぱは疑つてゐる。獸くさいにおいも実は自分の鼻がおかしくなつたのかと思うくらい、あの妖はにおい以外に獸

くささを放たなかつた。

「納得しておらん顔じやな」

「あ、バレた」

「まあ、いずれ分かるさ」

「ふーん」

納得しようかしまいか一瞬悩み、それでも納得はできないと思いながらおかっぱはまた相槌を打つた。

「あ、でもあの子は付喪神でしょ？ あれは分かつた」

「ああ、あやつは付喪神じや。おそらく、宝石か何か、その類の付喪神じやろう。いやしかし、あやつも何か足りぬ」

「え？ 足りない？」

「そうじや。何か、何か足りぬ気がする。今があやつだけでは成り立つておらぬはずなんじやが、どうにも分からん」

「なに？ つがい？」

「あー、番か。その線も考えられるじやろう」

「他になにがある？」

「うーん……」

「あ、あれが新しい宿？」

「ああ、そうじや」

話しているうちに、新しく世話になる宿はすぐ目の前にきていた。外見はそこまで綺麗ではないが、かといって汚くもなく、一般庶民の家といったところだろうか。いわば普通の宿屋だった。

「汰の朝栄と申します。鳩に遣いを頼んだ者ですが、よろしいでしようか？」

「ああ、汰の朝栄様。承つております。二階のほうにお部屋を用意させていただいております。椿の部屋になります」

「ありがとうございます」

「今回はひと月のご予約ですが、よろしいでしようか？」

「はい。状況によつては早くなつたり遅くなつたりするかもしぬませんが」

「承知しました。その際はご遠慮なくお申し付けくださいませ」

「ありがとうございます」

「ご飯の時間などを書いた紙をお部屋のほうに置いてありますので、ご一読ください。

それでは、ごゆっくりお過ごしくださいませ」

受付で鍵を貰い、朝栄は階段のほうへと歩いていった。おかげは受付のほうに一礼し、その後ろをついていった。

「ねえ朝栄、あの子は？」

おかっぱは朝栄に尋ねる。受付の妖は何者か、おかっぱは問うたのだ。

「あやつは子鬼。少し大人びて見えるが、生まれてまだ二十年も経つておらんじやろう。若娘といったところじゃ」

「ふーん」

「ほれ、部屋についたぞ」

「はーい」

朝栄が鍵を回し、ドアを開けた。ドアからはまっすぐ先の窓が見え、その先に森が広がっているのが見えた。二人がやつてきた宿は、ちょっとした森の中にあるのだ。

「綺麗な部屋だね」

「そうじやな。やはり、妖が多い土地はいい。宿も充実しておる」

「そうだね」

おかげばは荷物を床に置くと早速ベッドの上に飛び乗った。

二人は、雨を降らしに行つた土地では妖が経営する宿に泊まることにしている。朝栄がしそつちゆう訪れる土地であれば朝栄が持つていてる家で生活するのだが、初めて行く土地や滅多に行かない土地ではそれができないからだ。

「おかげば、片付けは明日にしよう。おまえも疲れたじやろう？」

「んー」

「飯を食つて、風呂に入つて、今日は寝てしまおう」

「そうしよー」

と言つたものの、そのままおかっぱが寝入つてしまつたことは言うまでもない。もちろん、朝栄がそのおかげに布団を掛けなおしたことも。

そうして明日には、おかっぱと朝栄の新たな生活が始まるのだ。

ある日の文屋

「あれ、お出かけですか？」

「ああ？ あー、イナハのカザミヤの」

「山羊やぎです」

「そう、山羊さん。なに？ ご依頼？」

「あ、はい。主人から文を預かっているんです。これを」

「あー、アガツマザキのほうね。承りましょう」

「ありがとうございます。これ、お代です」

「……確かに」

山羊という女性から代金を受け取った店主は、その代金が、設定されたものより少し
多めなのを見てほくそ笑んだ。

店主の名前は蟹ほたる。美波間よしはまという川沿いの土地で文屋ふみやを営んでいる。書かれた手紙を
預かり、届けるのが仕事だ。

「それで、どこにお出かけの予定だつたんですか？」

「アオグモのほうに行くんですよ。ご依頼があつたもんで」「へえ……文屋さんって出張みたいなこともされるんですね」

「訳ありでしてね」

よつこいしょ、と言いながら蟹は机に置いていたソフト帽を手に取りかぶつた。髪も短く背も高い蟹は、帽子までかぶつてしまふと男性のように見える。しかし蟹自身はそれを悪いようには思つておらず、むしろそうしたいようだつた。

「じゃあ、私も出ますので」

「あ、失礼しました」

蟹が店の鍵をちらつかせる。山羊は急いで店を後にした。その後、蟹が店を出て鍵を閉める。

「では、文のほう、よろしくお願ひします」

「ええ、お任せください」

どこか気だるげな礼をし、顔を上げると、山羊はにこりと微笑んで踵を翻した。それを見ると蟹も自分の行く方向を向いた。そのとき、背後から誰かに抱きつかれる。背中に当たるふつくらとした胸の感触に、それが女性だということが分かつた。そして、その女性に思いあたりのある蟹は煩わしそうに言つた。

「ちょっと、やめろよ」

「えー？ あなたが置いていこうとするからじやない」

「ちょっとアオグモに行くだけだ。貴様の足を借りるほどじやない」

「そうなの？ それならそうと言つてくれればいいのに。でも、一緒に行くわ」

「来なくていい。言う必要もない」

「一緒に行くわよお。だつて、あの子のところに行くんでしょう？」

「来なくていいって言つてるだろ」

「もーう」

蟹が次第に早足になるのを女も追いかける。その女は蟹の家に住み着いている妖であり、雷獣である。白く長い髪を揺らしながら、蟹の後をついていくのをやめない。

そして、彼女は蟹の腕をつかむ。

「あたしがいないとすぐ他の妖にちよつかい出されちゃうくせに」

「……」

「護衛役つてことで」

「護衛なら、護衛らしく少しは離れて歩け」

蟹は雷獣の妖の腕を振りほどいた。ばつが悪いとでも言うように頭の後ろを搔きながら、蟹はだるそうに歩いた。その三歩後ろを妖は嬉しそうに歩いている。

歩いていると川の流れる音が聞こえてくる。ずっと、川沿いを歩いているのだ。少し

川を覗けば亀がひよこつと顔だけを出していた。それを見つけて嬉しくなつた雷獸は軽い足取りを更に軽くして氣だるげに歩く蟹の後ろを歩く。

二人が向かっている青久茂あおぐもは、美波間の隣にある町だ。青久茂もまた、美波間のよう川沿いにある。住んでいる人はそこまで多くはないが、その分穏やかでいい土地だ。歩いて十五分もすれば、依頼があつたという家に到着する。それは小さな一軒家で、玄関ではなく庭へ回ると若い男の妖が出迎えた。

「あ、美波間の文屋さん。こんにちは」

「いつもお世話になつています」

だらんとした蟹の礼は、ただの前屈運動のように見える。しかしそんな蟹の態度を気にする素振りもなく、男の妖は中へと案内した。

「いつものところにいるから、上がつて」

「お邪魔します」

庭に靴を脱ぎ、二人は縁側から家の中に入つた。

「先に行つていいのか?」

「うん。僕はお茶を入れてくるから」

「気が利くな」

「まあね」

へへっと笑つて男は蟹の進む方向と違う方へ向つて走つていった。

彼は、この家に住む妖だ。詳しく述べば、時計の付喪神である。名前を辰儀ときのりといい、この家の主の暁海あきうみは、彼のことを「トキちゃん」と呼んでいる。

蟹は迷いなくその家の主の部屋まで歩いていった。何度も来たことのある、いわば常連の家なのである。

「美波間の文屋です、よろしいでしようか？」

襖の向こう側にいるであろう家の主に声をかける。「どうぞ」という声が返つてくると、蟹は襖に手をかけた。

「こんにちは。遅くなつてしまつて申し訳ありません」

「いいえ、お待ちしていました。大丈夫ですよ、こちらは急いでいませんから」

暁海は笑つて答えた。

「お体はどうですか？」

「悪くないですよ」

「そうですか。それで、ご依頼のほうはいかがしましようか？」

「ああ、お願ひします。すみません、手を煩わせてしまつて」

「いえ」

蟹は持つてきた鞄から道具を取りだすと、筆を手にして一枚の紙と向き合った。

「準備は整っています。どうぞ」

「じゃあ、始めますね」

それを合図に、暁海は「前略」と言つて話し始めた。それを蟹は聴き取り、書き取つていく。手紙にしているのだ。

暁海は目が見えない。とはいへ、最初から見えなかつたのではない。最近見えなくなつてしまつたのである。医者曰く、彼女は原因不明の病にかかっているのだ。暁海が病にかかるてから、暁海は、家を出た彼女の姉に定期的に手紙を出すようになつた。最初こそ暁海自身が書いた手紙を文屋である蟹に届けるよう頼んでいたのだが、目が見えなくなつてからというもの、こうして蟹が暁海の代筆をするようになつた。いつも気だるげそうで有名な蟹だが、これを提案したのは蟹のほうだつた。

「目が……目が、見える時間がまた少なくなりました。日の出でいる間は全く、月が出ている間ですら、見える時間が短くなつてしまつました。けれど、その分きちんとトキちゃんが手伝つてくれています。最近はお裁縫もできるようになつたみたいです」

暁海の最近の事情は、蟹が全て知つていると言つても過言ではない。暁海が姉に伝えたいことを全て聞いてしまうのだから、当然と言えば当然だ。しかし、聞いてはいけないここまで聞いてしまつているようで、蟹は手紙を書きながら少しばかりの罪悪感を覚

える。

「お姉ちゃんも、体には気をつけて。お休みがそれそだつたらまた会いましょう。ではまた、お手紙を書きます。草々」

暁海の言つた言葉通りに蟹は手紙を書ききつた。草々、と書いて筆を置くと一息ため息をついた。

「お疲れ様でした」

「今日は少し短いですね」

「そうですか？ もうちよつと書いてあげたほうがよかつたかしら？」

「いえ」

いつもより便箋が一枚少なく済んでしまつたと思いながら蟹は書き終えた手紙を封筒に入れた。そして、部屋の中に辰儀が入つてきていたことに気がつく。

「文屋さん、お茶です」

「ありがとう」

「途中で声かけようかと思つたんだけど、喋る口が止まらなかつたから。あ、暁海さんにもお茶です」

「ありがとうございます」

「冷めてるからすぐ口を付けて大丈夫ですよ」

「ありがとう」

辰儀にしてもらうことひとつひとつに暁海は礼を言う。それに辰儀は頬を綻ばせながら、せつせと暁海に世話を焼いていた。

「じゃあ、文もいただいたことですし、私たちはこれで失礼します」

「もう行かれるんですか?」

「残念ながら。他のご依頼が入つて、これからアガツマザキのほうに行かないといけないんですよ」

「まあ、あがつまざき吾妻咲に? それは大変ですね」

「いいえ、こいつの足を使えばすぐそこです」

「あ、やつぱり、大人しくしてるけどいらしてたんですね、ひかり光さん」

「へへ、こんにちはー」

「こんにちは」

雷獸は答えた。蟹は今までその名前で彼女を呼ぶことはないが、彼女を知る者は彼女のことを「光」という名で呼ぶ。

「光の速さで飛んでいくよってね」

「光の速さで行くな。私が置いて行かれる」

お茶を啜りながら蟹が言つた。

「あ、そうだ。お代のほうを。トキちゃん」

「はい」

暁海に言われて、辰儀が懐から封筒を取り出した。差し出された封筒を蟹は受け取り、中身を確認する。

「……多くないですか？」

「いいえ、きつかりです」

「そうですか」

蟹は何か言い返そうとしたが、そのまま引き下がった。

「じゃあ、失礼します。次はまた一週間後を予定していますが、何かありましたら遣いを飛ばしてください」

「ありがとうございます」

「またご利用ください。じゃあ

蟹は立ち上がり、部屋を出た。その後に光も続く。

「僕、表までお見送りしてきます」

辰儀も立ち上がり、暁海の部屋を後にした。

歩き慣れた廊下を歩き、入ってきた縁側のほうへ歩いていく蟹。家中に入つて脱いでいた帽子を再びかぶり、靴を履いた。蟹はこう見えて、ファンションは新しいものを

取り入れている。早々に和服を着るのをやめてシャツと羽織という姿にした。最近は靴を購入し、草履より歩きやすく長時間歩くことができると言つた。蟹は、最近のファッショングの利便さを気にいっていた。

「文屋さん、今日はありがとうございました」

靴を履き、これから出ようとして蟹たちの後ろで、辰儀が縁側で正座をして頭を下げた。辰儀に気がついた蟹は辰儀のほうへ歩み寄ると、一度懷に収めた封筒を出し、中のお金をいくらか取りだして辰儀に渡した。

「やつぱり、この額は多い。暁海さんはお礼だとおっしゃるかもしれないが、私は受け取れない。そつと、暁海さんのお財布に返しておいてくれないか?」

「え、でも……」

「いいから。頼む」

「承知しました」

蟹にお金を握らせられ、辰儀はそれを受け取った。

「でも、きっと暁海さんは気がつきますよ?」

暁海は鼻がいい。一度蟹に渡したお金を元の場所に返したとして、蟹のにおいに気がついてしまうと辰儀は言つたのだ。

「それならそれでいい。そのときは、私がどうしてもと言つて引き下がらなかつたと

「言つてくれ」

「では、そのようにさせてもらいます」

辰儀は折り畳まれ小さくなつたお札をちらりと蟹に掲げ、言つた。

蟹は、辰儀がそうするのを見て踵を翻した。

「ねえ蟹、今から行くの？ 吾妻咲」

「ああ、この足で行く」

「なんならあたしひとりで行けるけど？」

「ハツ、馬鹿を言うな、貴様におつかいなんざ百年早いわ」

「失礼ね、おつかいくらいできるわよ」

「信頼が必要なんだよ、私の知らないところで何かされたら困る」

「ちえーっ」

「イナハのかザミヤから預かつた文の宛先は初めて見るところだ。自分で行つておきた
い」

「あらそう。じゃあ、行きましょう」

光はきよろきよろと辺りを見回すと、瞬時に獣の姿になつた。人間の姿から妖の姿に
戻したのである。雷獣である光の妖の姿は二、三メートルはある。蟹が背中に乗るには
十分の大きさだ。

「早く乗つてよ」

「いつも思うが、妙だよな、これ」

「えー？ 大丈夫よ、普通の人に馬に見えるようにしてるから」

「それにしてもだ。足が速すぎる馬に見えていないか？」

「大丈夫、そこまで行くと風に見えてるわ」

「そうは言つてもなあ……」

「仕方ないでしょ。ほんとは空を行きたいけど、人間つて生身で空を行けないんでしょ
？ 地を行くしかないんだから、文句言わないでよ」

「まあ、そうだが」

「ほら、早く乗る」

光に急かされて螢は光の背に跨つた。螢が背に乗つたのを確認するや否や、光がびゅ
んと走り出す。風を切つて走つていくのに、螢は未だに慣れない。目を開ききることが
できないまま、光の背につかまつていることしかできない。

「アガツマザキは分かるな？」

「分かるわよ。だてにいつも遊び歩いてるわけじやないわ」

「そうか」

光の話にツッコミを入れる気力もなく、余裕もなく、螢は光が知つてているというらし

い吾妻咲へと向かつた。

床に伏せる鬼

吾妻咲あがつまさきへ近づいてくると、今までの住宅地の景色とは一変して、色とりどりの花が咲く華やかな景色になつた。木々に溢れ、花に溢れた土地。木や花を潰さないよう光は走り、次第に減速して目的地近くで足を止めた。

「この屋敷だな。仕事をしてくるからそこで待つていろ」

「ついていくわよ?」

「無用だ。むしろ、馬としてそこにいてくれたほうが助かる」

「分かつた」

美波間よしばまから吾妻咲は、歩いてくるには不自然な距離だ。歩ってきたと言つてもいいが、これほど立派な屋敷に住んでいる主人なら、馬や籠を用意すると言いかねない。そうすると、光を置いていくことになる。置いていつてもいいが、その後の光の拗ねひねりようが正直面倒くさい。それなら、光を馬の姿でここに置いておくのが最も賢い方法だと蟹はがるは思いついた。

この屋敷は初めて来た。屋敷は大きかつたが、蟹はその屋敷に住む人の名前は知らなかつた。大きな企業の社長でもあれば名前くらい聞いたことがあるはずだが、聞いたこ

とがないのだからそこまで有名な家ではないのかもしれない。もしかしたら、吾妻咲では有名な誰かかもしれなかつた。

「御免ください」

引き戸を叩き、いるのかも分からぬ家主に声をかけた。

「御免ください」

返事が返つてくることはなく、誰かが玄関を開けようとする音もしない。今、家主は家を空けているのかもしれない。蟹が引き戸に文を挟んでその場を去ろうとしたそのとき、背後から「もし」と声をかけられた。

「どちら様でしようか?」

肩ほどまでの黒い髪に、瑠璃色の目。着流しを着たその人は、その家の主だつた。
「美波間から参りました、文屋でございます。以後、お見知りおきを」

蟹はその人に向かつて一礼した。相手の女性も蟹に向かつて礼をする。

「イナハのカザミヤ……やぎ山羊様より文をお届けに参りました。ご確認ください」

「あつ……ありがとうございます」

いなは伊南波の山羊という人物に心当たりがあるのか、女性は渡された文を手に取つた。

「返事の文を山羊様にお送りすることもできますが、いかがいたしましようか?」「あ、えつと……」

「二時間程度ならお待ちできますが」

「えっと、その、すぐにはお返事できないと思いますので……」

「そうですか。では、私はこれで」

「あ、あの」

「何か？」

「ありがとうございました」

「いえ、仕事ですから。では、また」

蟹は一礼をすると、その場を去った。

蟹が去っていくのを見て、手紙を受け取った女性、すずいろ鈴色は家中へと入った。

「ただいま帰りました」

玄関で鈴色はぼつりと呟いた。それに返す声はないと分かつてはいるが、鈴色は習慣づいてしまったこれを未だにやめることができない。

鈴色は自分の部屋に仕事道具を置くと、すぐにその隣の隣の部屋に行つてノックをした。

「鈴色です、入ります」

部屋の中に入る者の返事を聞くことなく、鈴色はその部屋の襖を開けた。

「なんだ、帰ってきたのかよ」

「ただいま帰りました」

部屋の中にいたのは、ひとりの男の鬼だつた。鬼は布団に横たわつたまま、目だけを動かして鈴色を見た。鈴色は鬼の枕元へ行くと、先ほど文屋から預かつた手紙を鬼へ見せた。

「靖助さん、届きました。伊南波の山羊家からのお手紙です」

「あ？ ああ……」

を一瞥して目を閉じた。

「まさか、あの家が返事を出すとはな」

「私も驚きました。仕事にならないような仕事の相手はしないと聞いていたので」「お前、何かしたんじやないのか？」

「何かつて何ですか？ 私は普通にお手紙を書いただけです」

「なら、俺がいかにも奇妙だつたつてことかねー」

「そんなつ」

「おい、読むならさつさと読め」

「あ、は、はい」

鈴色の反論に靖助は聞く耳を持たない。鈴色は、靖助に言われるまま手紙に目を通し

た。鈴色も鈴色で、靖助を言い負かそうなどとは思つていなかつた。

鈴色は、山羊家から送られてきた手紙をじつと読んだ。読み間違いがないよう、読み落としがないよう丁寧に読んだ。何度も何度も同じ文章を繰り返しながら読んだ。

そして、「ああ」と消え入るような細い声を漏らした。
「どうした？ 絶望するような内容だつたか？」

「はい……」

「そこで正直に頷くのがお前らしいよ。ちつたあ俺のことも気遣つてそこは嘘でも言つておけよ」

「ごめんなさい……」

「ま、いいけどさあ。お前、外でもそんなんだつたらやつてけねえんじやねえのか？」

ぼろぼろと涙を流す鈴色をよそに、靖助はぶつぶつと文句を言う。

「でも、だつて、こんな……」

「いいんだよ、別に。最初から期待なんてしてなかつた。伊南波の山羊家はそんなもんだ。あそこは力こそ強いが仕事にならん仕事はしねえからな。ま、返事がきただけアレだつたつてことだ」

「でも、でも……」

「鈴色、喉が渴いた。お茶」

「はい……」

鈴色は涙を手で拭つてしまふと、部屋から出ていった。

鈴色が部屋から出ていくと、靖助はかすかに動く右手で鈴色が置いていった手紙を手に取つた。顔を顰めて目を細め、字を読みもうとした。ぼんやりと見える文字をなんとか読み、ため息をついた。

「そうか、そうか、これは、治らないなあ……」

治ると思っていたわけではない。しかし、治ればいいのにという希望がなかつたわけでもない。その一通の手紙が与えた衝撃はそう小さいものではなかつた。靖助は口では「期待なんてしていなかつた」と言つたが、手紙を読み終えた後の落胆のため息を止めるることはできなかつた。

「失礼します。靖助さん、お茶を持つてきました」

「ああ」

何度もかのため息をついたとき、鈴色がお茶とお茶菓子を載せたお盆を持って部屋に入ってきた。靖助は体を起こそうとし、鈴色はそれに手を貸して靖助の上半身を少しばかり起こさせた。靖助の背中側にはクッションが積まれている。

「靖助さん、お茶です」「悪いな」

靖助にコップを持たせると、靖助はゆっくりと口に近づけてお茶を飲んだ。

「鈴色」

「はい」

「お前、あの手紙のことは気にするな」

「……」

先ほど読んだ手紙のことを靖助は話す。

「どうせ、俺はある手紙を読んだことを忘れるんだろう。それに、俺を痛めつける根源がどれかすら忘れてしまったのに、それを忘れろと言われたつてどうしようもねえ。きっと、俺の中には残っているんだろうが、どうしようもねえよ」

「でも、靖助さん」

「いいんだ、鈴色。いいんだ……」

靖助はそう言つて鈴色を睨んだ。それ以上は言つてくれるなど言うようだつた。

手紙には、靖助の謎の病を治すには、靖助の痛みの元である一番痛む部分を失くすしかないと書かれてあつた。靖助は身体全体に痛みが走る。全身が痛くてたまらないため、日がな一日布団の中で横になつていることしかできないのだ。その上、靖助は自身の記憶も失いつつある。どこから靖助の病が始まったのかということを、靖助自身忘れてしまつていたのだ。

「私、もう一度お手紙を書いてみます」

「鈴色」

「だつて、これでは靖助さんは……」

「だからいいって言つてるだろ。いい加減にしろ。いつまで経つても終わんねーだろ」「もう一度。もう一度だけですから」

「あ、おい」

そう言いきると、鈴色は靖助のいた部屋を出ていった。靖助は鈴色を呼びとめようとしたが、鈴色が靖助の呼びかけに止まることはなかつた。鈴色に閉められた襖を見て靖助は長いため息をつき、再び布団に横になつた。見上げた天井は木目色で、靖助の見慣れた天井だつた。

靖助の部屋を飛び出した鈴色は、そのままの勢いで自室へと向かつた。手にはあの伊南波の山羊家からの手紙が握られていた。

鈴色は、あの手紙を読んでぴんときたことがある。それは、靖助の痛みの元のことだ。鈴色には、靖助の痛みの元について思いあたることがあつた。しかし、鈴色はそれを靖助に打ち明けることができなかつた。なぜなら、鈴色はその靖助の痛みの元を頭か心臓であると踏んでいるからである。

『伊南波 山羊家当主様』

鈴色は筆を取り、再び文をしたため始めた。

靖助の痛みの元がもし鈴色の思うように頭か心臓だつたなら、そこを失くしてしまうことはできない。他の治療方法はないのか、と鈴色は尋ねる気でいた。

鈴色は思つたことを書いた。情では動かないとの噂もある伊南波の山羊家だが、また今回のように返事をくれるかもしれない。何か、山羊家の興味を引くようなことがあるかもしれない、と、書けることは全て書いた。

とはいへ、相手に失礼がないようにと何度も手紙を書き直し、手紙を書き終えた頃にはすっかり日が暮れてしまつていた。鈴色は、手紙を明日出すことにしてとりあえず眠ることにした。眠る前に一度靖助の部屋を覗くと、靖助はもう眠つたようで鈴色の呼びかけに対して答えることはなかつた。

雨の前の童話専門書店

「はー、今日もいいお天気だね」

「そうですね」

古びた童話専門書店。そこにいるのは店主と呪術師。店主は勘定場で本を読み、呪術師は売り場で絵本を漁っている。いわばいつもの光景がそこには広がっていた。

「そういえば、来週から雨が降るらしいよ」

「来週ですか？ よくそんな先のことが分かりますね」

「おかっぱさんから聞いたの。昨日たまたま商店街で会つてさ、そこで」

「ああ、おかっぱさんですか」

おかっぱ。三日前に初めて童話専門書店に現れた旅人だ。おかっぱ頭をした女性で、彼女自身も連れも彼女のことを「おかっぱ」と呼ぶものだから、ふたりもおかっぱと呼んでいる。彼女の連れは龍神という位の高い妖である。名前を朝栄あさはるという。

ふたりは三日前にこの地を訪れ、この近くの宿に泊まっているのだという。この辺一帯に雨を降らしにやつてきたそうで、この地で術を使うからとこの地に住んでいる妖に挨拶にきたのだった。

その妖というのが、この童話専門書店に住んでいる神狼で、五歳ほどのヒトの姿をした妖である。名前を文多ぶんたという。

「はい、お茶」

「ありがとうございます」

文多は基本、本屋の奥にある家の中では過ごしているが、たまに店主のいる勘定場に顔を見せては新しいお茶を差し入れていく。

「それでおかっぱさんガさ、来週から雨が続くから傘準備しておいたほうがいいよつて」「そうですか。そうですねえ、傘、どこにしまつたかしら」

「最近雨降つてなかつたからね。私もどこにしまつてるか忘れてる」

呪術師の暁空あきらは笑つて言つた。

呪術師である暁空と違つて、おかっぱは陰陽師を名乗つている。ふたりともしていることは風水や占いや祈祷が主であるが、術の範囲や方法などの些細な部分が異なつている。暁空は医療やまじないの類を行うが、おかっぱは風や星、相談者の相を読む。

「そういえば、おかっぱさんは陰陽師でしたつけ。陰陽師つてなんですか？」

「あー、結構あいまいなんだよね、これが」

「あいまい？」

「そう」

暁空が読んでいた本から顔を上げ、店主のところまで近寄ると腰をおろして話を続ける。

「やつてることはほとんど同じみたいなんだけど、薬草扱つたりまじないとかお祓いとかするのが呪術師で、星とか風とか読んで未来を予想したり相を読んだりするのが陰陽師、つて感じかな。でもはつきりそう決まつてるわけじやなくて、名乗つた者勝ちみたいなど、ころはあるよ」

「そうなんですか？」

「うんうん。地方によつては逆になつてるとことかまとめて陰陽師つて言つてるところとかあるみたいだし。呪術師のほうが十分怪しい響きしてゐるから、あえて陰陽師つて言つてる人もいるしね」

「へえ……。そういうお知り合いがいらっしゃるんですか？」

「まあね」

暁空は言つた。

「私の故郷はどちらかというと呪術の教えが根付いてて、呪術師の先生もいるからそこで習つたんだけど、いろんなとこを旅してるとさ、そこにはいろいろな町や村があつてさ。根付いてる風習も存在する職業もまばらだし、そこで出会つた呪術師や陰陽師を見ると、やっぱり地域によつて特性が違うよなーって思う」

「そうですか」

「そういえば、この町は呪術師も陰陽師も通用するんだね。私が呪術師だつて言つても驚かれないし、おかっぱさんが陰陽師だつて言つても店主さん驚いてなかつたし」

「ああ……まあ、この町は自然が多いから住んでる妖や精靈なんかも多いから、旅する呪術師や陰陽師が中継地にすることも多いみたいですし」

「あー」

妖や精靈の類が多く住んでいると、その類の者が経営する宿泊施設も増える。宿泊施設が多くあれば、その類の者と協力関係にある呪術師や陰陽師が利用するようになる。よつて、この村は旅をする呪術師や陰陽師が旅の中継地点とすることが多いのだ。

「店主さんはこの村から外に出たことはあるの？」

「え？ 私ですか？」

突然の質問に店主が言葉を詰まらせる。そして苦笑を浮かべると言つた。

「ないです、ねえ。生まれてからずっと、この家で暮らしていますから」

「へえ、なんだ。え、出ようと思つたことはないの？」

「……ありません。物ごころついた頃には、もう文多さんがいらっしゃいましたから」

「あ、そうなんだ」

「はい」

暁空と会話を交わしつつも、店主は読んでいる本から顔を上げることはなかつた。店主は本を読んでいるわけではなかつたが、どことなく暁空と目を合わせづらかつたのだ。

「文多くんは？ 昔からあんな感じなの？」

「え？」

「小さくて物静かな感じ？」

「あ、あー、まあ、そうですね。お喋りな妖ではないですね。今も昔も」

「ふうん」

暁空が相槌を打つ。店主はそれ以上文多のことについて話はしなかつた。暁空もまた、それ以上文多のことについて聞こうともしなかつた。

「そちらこそ、まれさんとはどうなんですか？」

店主は暁空に尋ねる。すると、暁空はへらと笑い、言つた。

「まればねー、母の形見なんだよね」

「え」

「あの子はね、宝石の付喪神なの。うちにある宝石といつたら母のつけてた指輪くらいだつたからね、きっと彼女はそれなんだよね」

「へえ……」

暁空の言うことに店主は興味深そうに相槌を打つた。

「なんでもまた付喪神になつたかは知らないんだけど、まあ、今は相棒として隣にいてくれるからさー」

「そういえば、暁空さんひとり暮らしされてるんでしたつけ?」

「そうだよ。この町の外れの賃貸宿の個室借りてるの」

「町の外れですか? どうしてまた?」

「妖が営んでる宿なのよ。まれを連れていくにはそれが一番いいからね」

「ああ、そういうことですか」

「うん、そういうこと」

人間には妖を目視できる人間とそうでない人間がいる。そうでない人間のほうが多く、妖を見る人は少ない。人間が営む人間のための宿を暁空が借りたとして、そこにまれの見える人がいたとしたらややこしい問題が起きてしまう。そのことを案じて暁空は村の外れにある妖の営む宿で生活をしているのだ。

「ほんと、賑やかでいい村だよ、この町は」

お茶を啜りながら暁空が言つた。

「噂にも聞きますが、そんなに賑やかですか、町の外れは」

「そうだね。町の外れには妖がたくさんいるよ。私が住んでる宿にもいろんな妖がいる

し、宿もいっぱいあるしね。おかっぱさんが泊つてる宿も私のところとは別のところだ
し。そのくらい妖はたくさんいるかな」

「へえ」

「あ、そうだ。今度店主さんも文多くん連れて遊びにきてよ。まれも喜ぶからさ」

暁空が店主に笑顔を向ける。店主は目を丸くし、ぱりぱりとこめかみの辺りをかい
た。するとそれを見て暁空が更に言つた。

「出不精なのもほどほどにしないと。店主さんも、文多くんも」

「……いやあ、文多さんが出たがらないもので」

困つたように店主が言つた。気まずい雰囲気から逃れようと店主はそのまま茶を啜
る。

「出られないんです」

「え、なにそれ自縛靈なの？」

「いや、文多さんは妖ですから靈ではないかと」

「自縛妖？」

「……まあ、そんなところでしようか」

「うーん、呪術的にどうにかできたつけな……」

「ああ、いえ、いいんです、文多さんも気にしてないようですから」

「え？ そう？」

「はい」

店主は慌てて手を振り、暁空の考え方を打ち消そうとした。暁空はそれに反応し、悩むのを止める。

「それに、私だつて買い物に行くときは外に出ますから」

「いやあ、それだけじゃなくともっと外に出たほうがいいって意味なんだけどなー」

「それは……その、あんまりひとりにすると文多さんがかわいそうじやないですか」「あー」

押し問答。ああ言えどこう言う。そんなやり取りが続き、暁空のほうが先に諦めた。

「じゃあ、まあ気が向いたらおいでよ」

そう言つてこの話を打ち切つた。店主も「考えておきます」とだけ言つた。

「それにしても、来週から雨だとは思えない空だね」

「そうですね」

窓から見える青空を見ながら店主たちは会話を続ける。空は、うつすらと白い雲が流れている。薄い水色の空が広がっている。とても来週から黒雲が広がる空には見えなかつた。そのとき、風が吹き、空を映している窓ガラスが小さく揺れた。

「何か通つたね」

「そう、ですね」

その風の正体は、妖だつた。そのことを店主も暁空も感じとつた。

「なかなか大きな妖だつたね」

「そう、ですね」

稀に見る大きい妖にふたりは驚き、顔を見合わせていた。そして、今の風の正体に驚いたまれたちが店主たちのところに姿を現した。

「ねえねえ！ 今の妖だよね？！ とつてもびっくりしたんだけど！」

「……」

まれに手を引っ張られついてきた文多もどことなく訝しげな顔つきをしていた。

「あ、うん、妖だと思う、けど

「だよね！」

あまりのまれの大声に人間も驚き、たどたどしく暁空が答えるとまれはまた大きな声で頷いた。

「あー、びっくりした。おつきい妖だつたよね？」

「うん、大きかつたね」

まれは暁空のところに駆け寄り、跳びつく。そのまままれは抱っこをねだり、暁空に抱きついた。

「なんの妖だつたんだろうね？」

「さあ、そこまでは分からなかつたな」

「そうですね。私も分かりませんでした」

「まあ、あの一瞬じやね」

「そうですね」

店主も暁空も、妖を感じ取る力はあれど、強いわけではなかつた。一瞬通つていつただけの妖が何者であるのかということはさすがに分からなかつた。

「まれも分からなかつたの？」

「うん、分からなかつた」

「そつかー」

あからさまに悲しそうな顔をするまれをあやしつつ、暁空は言つた。

「来週から雨つていうの、本当なのかもね」

そう言いながら再び窓の外を見る。そこには先ほどと同じような空が広がつていたが、先ほどは感じなかつた奇妙な感覚を覚えた。

「傘、探しておかないといけませんね」

「そうだね。じゃ、そのためにもそろそろお暇しようかな」

そう言つて暁空は膝に乗るまれを立たせ、自分も立ち上がつた。店主もふたりを見送

るために立ちあがる。

「お気をつけて」

「はーい。またきます」

「さよなら、店主さん」

「さよなら」

まれと店主は手を振つて別れ、まれたちは帰路に着いた。店主と手を振つている間に先を行つてしまつた暁空に追いつこうとまれは小走りになる。その小走りの音に気がついた暁空は少し歩くのを遅くし、振り返つた。

「空ちゃん、金探すの?」

「探すよ」

「買わないの?」

「買わないよ。探すの」

「去年もそう言つてなかつた?」

「去年は去年。今年は探す」

「ふーん」

「ふーんじやなくてまれも手伝つてよね」

「えー? 分かった」

「はーい」

まるで姉妹のように仲睦まじく会話をしながらふたりは歩いていく。ここから自分たちの宿にはまだ暫くあつた。

「今日は買い物はしない?」

「うん。昨日のごはんが残つてゐるからね」

「えー、昨日の残りなの?」

「そうだよ」

「えー、つまんなーい」

「だつたらまれがご飯つくつてくださいーい」

「ごめん、それは無理」

「だつたら文句言わない」

「はーい」

こうなると食べて帰ろうと言つても聞いてくれないだろうな、とまれば心の中で諦めて口に出すことはしなかつた。

それからそのまま適当な会話をしながら宿へと帰つた。宿に帰る頃には日が暮れ始め、ふたりは慌てて干していた洗濯物を取り入れると晩ご飯を食べて眠つた。傘を探すのはすっかり忘れていた。

郷からの便り

朝、部屋の戸を叩かれて暁空は目を覚ました。

「はーい」

眠い目を擦りながら返事をする。覗き窓から訪ね人を見ると、大家の娘の子鬼だつた。暁空が玄関の扉を開けると、子鬼が申し訳なさそうに眉をひそめ、暁空の顔色を窺つた。

「おはようございます。すみません、まだお休み中でしたか？」

「あ、ううん、気にしないで。どうかしたんですか？」

「あ、先ほど文屋さんから暁空さんにお手紙が届いたのでお持ちしました」

「本当？ ありがとう」

子鬼から茶封筒を受け取り、差出人を確認した。

「確かに受け取りました」

茶封筒をちょいと持ち上げ軽く会釈すると、子鬼も暁空に一礼し、その場から去つた。子鬼が部屋の前から立ち去るのを見て、暁空は玄関の扉を閉める。もうひと眠りしようと、手紙はあとで読むつもりで机の上に置いた。

寝室の襖を開けると、布団の中でもまだまれば眠っていた。まればはぐり倒した掛け布団を掛け直してやる。すると、まればは目を覚まし、眠たそうな目で暁空を見つめた。

「おはよう、まれ。起こしちゃった?」

「んーん……おはよう」

おぼろげな口調でまれは暁空と挨拶を交わした。まれはぼんやりとしたままむくりと起き上がり、暁空に抱きつく。暁空はそれを受け止めた。

「んー? 海ちゃんのにおいがする……」

「え?」

「もしかして、お手紙きた?」

くんくんと暁空のにおいを嗅ぎながらまれが尋ねた。暁空は「うん」と頷く。

「きたよ。さつきね」

「読みたい」

「もうひと眠りしてからでもいい?」

「えー」

「お願い」

「しかたないなー」

「ありがと」

暁空はそう言うとまれを抱いたまま布団に横になつた。

とにかく眠たかった。昨夜は夜更かしもしないできちんと床に入つたはずであるのに、眠たくて仕方がなかつた。先ほど、子鬼のノックで起こされたからかも知れない。あれがもし自分のタイミングで起きられていたら、目覚めはまだよかつたのかかもしれない。など、そんなことを思つてゐるうちに暁空は寝入つてしまつた。

スースーと寝息を立て始めた暁空の顔を、まれは暁空の腕に抱かれながらじつと見つめていた。昔、暁空が赤ん坊だつた頃のことを思い出してゐた。あの頃から寝顔は変わらないなと思つてゐた。

まれは、暁空の母親の指輪についていた宝石の付喪神である。暁空が生まれる前から暁空の家にあつたが、付喪神になつたのは最近のことでの、指輪だつた頃のことはつきりとは覚えていない。それでも赤ん坊の頃の暁空の寝顔は印象的だつたのだろうか、なぜか時々思い出される。

暁空はよく眠る子で、隣で双子の妹がどんなに泣いていようとん気に眠り続ける子だつた。暁空の母親が暁空の妹を抱き、あやしている傍らで指輪の宝石は寝こけている暁空を見つめていた。のかも知れない。

まれは、眠つてしまつた暁空の腕をすり抜け起き上がつた。おなかが空いたのである。

何か食べるものはあつただろうかと隣の部屋の台所まで探しに行くと、机の上に封筒があることに気がついた。まれはそれを手に取り、においを嗅いだ。

「海ちゃんからだ」

先ほど寝ぼけているときに暁空からにおつたにおいがこれであることにまれは気がついた。

まれは、その茶封筒を日差しの入る窓にかざしてみる。そのままくるりと一周その場で周り、そして座りこんだ。

手紙を開けるか否かを迷い、まれはちやぶ台の上に手紙を戻した。その手紙とにらめっこをする。勝手に開ければ後で暁空に怒られる。しかし、まれは結局我慢できず手紙を封を切った。

封を切ると、便箋が四枚出てくる。その便箋を一枚ずつ捲つてみる。文字を読むことができないため、まれは本当に便箋を捲つてしているだけだった。それでも便箋を捲る度に香る差出人の香りが、まれに安心感と充足感を与えた。

「いいにおい……」

便箋を胸に抱えて、まれは横たわった。親しみを覚える香りに包まれて、まれは再びまどろみ始める。



「おはよー、まれ。つて寝てるし」

寝床と居間を仕切る襖を開けてみると、居間で横たわったまれの姿が暁空の目に入つた。

「もー、仕方ないんだから」

まれに毛布でも掛けてやろうと思い、先ほど脱いだばかりの毛布を手にまれのほうに寄ると、まれの腕の中に紙切れがあるのが見えた。暁空はそれが先ほどの手紙であることに気がついた。

「あー、また勝手に開けてる」

暁空は呟いてまれのおなかの上にある手紙を拾つた。

暁空に届く手紙を勝手に開けてはいけないと、暁空は日頃からまれに言いつけている。まれも普段はその言いつけを守つてているのだが、その言いつけを守れず手紙の封を開けることがある。それは、暁空の妹から手紙が届くときだ。まれにとつても特別な人からの手紙であるから、まれも暁空の言いつけを守れず封を切るのだ。

今日届いた手紙も、暁空の妹からのものだつた。名前を暁海といい、彼女たちは双子の姉妹である。

暁海は、しばしばこうして暁空に手紙を寄こす。謎の病に侵されて床に臥している暁海は、遠い地を旅する姉に自らの近況を報告しているのだ。

暁空はやかんでお湯を沸かしながら手紙に目を通した。

「……」

言葉も出なかつた。ただただ手紙に目を通し、ため息を漏らすことすらもできなかつた。暁空が言葉を発するより先にやかんが鳴いた。暁空は慌ててやかんの火を消した。湯呑にお湯を注ぐ。中には珈琲が入つていた。最近の流行り物らしく、童話専門書店の店主から貰つたものだつた。一度淹れてみたのだがどうにも口に合わなかつたのだと店主は言つていたが、確かに苦さと渋さ、それから酸味のある飲み物だつた。幸い、暁空の口には合つたようで、店主からそれを貰つてからといふもの頻繁に珈琲を飲んでいる。

珈琲を淹れるのに専用のカップがあるというのだが、生憎暁空は持ち合わせていなかつた。そもそも、暁空は旅人だ。元々荷物が少なく、これ以上荷物を増やす気もない。身軽でいなければ旅立つ時に旅立てないのだと暁空は言う。

「あちつ」

淹れたての珈琲は熱かつた。何度も息を吹いて冷まそうとするが、なかなかそはならない。暁空は諦めて手に持つていた湯呑を台の上に置いた。そしてその場で膝を抱えて座り込む。立つているのも辛くなつたのだ。

「……」

どうにかしなければ。どうにかしなければ。心の中で何度も繰り返し唱える。しかし、どうしようもないのが現状だ。一刻も早く治療法を見つけなければならぬのも事実、しかし、治療法を探している間暁海を独りにしているのも事実。もう暁海が長くないことを知らせる手紙は、静かに暁空を焦らせた。

そのとき、居間で眠っていたまれが目を擦りながら台所の方へ歩いてきた。

「空ちゃん……？」

暁空の姿を探して台所までやつてきたのだ。そして、台所で蹲っている暁空を見つけてまれが小さな叫び声を上げる。

「空ちゃん！ 大丈夫？」

暁空の方に駆け寄り、しゃがみこむ。背中を摩りながら、まれは暁空の顔色を窺う。

「空ちゃん、どうしたの？ おなかいたいの？」

「まれ……？」

暁空は突然現れたまれを見て驚き、顔を上げた。

「空ちゃん、どうしたの？ おなかいたいの？」
「空ちゃん？」

「ねえ、まれ」

暁空はまれに声をかける。

「なに？」

まれが尋ねた。

「海ちゃんのどこ、帰ろつか？」

「海ちゃんのどこ？ 帰るの？」

「うん」

暁空は頷いた。きゅ、とまれを抱きしめ直す。

「海ちゃんね、あんまり元気ないんだって。だから、一回帰つて顔見せない？ そしたら、きっとまた元気になるから……」

「空ちゃん……」

尻すぼみの声。少しくぐもつている。まれはどうしていいか分からず、とりあえず暁空をそつと抱きしめ返していた。

暁空は、今会いに帰らなければ暁海と会わないまま別れてしまうことになるだろうと考えていた。暁海の治療法を探すために旅に出てもう何年と過ぎたが、未だに見つかる気配はない。一縷の望みをかけて見つかりもしないものを探し続けた結果大切な妹と一緒に帰り、妹を看取つてやれる方がいいのではないか。そう思つていた。

「空ちゃん」

まれが少し暁空から離れ、暁空の顔を覗き込む。暁空は一筋涙を流していたが、まれに向かつて優しく微笑んだ。

「いいよ。空ちゃんが帰るなら、まれも帰るから」

そう言つてまれは再び暁空の胸に飛び込む。

「ありがとう、まれ」

暁空はそれを抱きとめた。

まれと暁空は相談して、二時間後にここを出発することにした。

元々、荷物は多くなかつた。正直、少ない荷物を纏めるのに二時間もはかかるないが、ここを出る前に世話になつた人に挨拶しておく必要がある。まれと暁空は大方荷物が片付くと、部屋を出て童話専門書店へと出かけていった。

外へ出ると、珍しく雨が降つていた。そういうえば、龍神様が雨を降らすとかなんとか言つていたつけ、と暁空は玄関先に置いてあつた傘を手に取つた。

「空ちゃん、雨だね」

「そうだね」

「傘、探しててよかつたね」

「そうだね」

一本しかない傘の中に収まるよう、二人はぴつたりとくつついて歩く。まれは暁海の左腕に抱きつくようにして歩いている。暁空はそれを歩きにくいと言いながらも払うことなく童話専門書店へと歩き続けていた。

「さすが、龍神様はやると言つたらやるねー」

このところ一切雨の降らなかつた土地に雨が降つてゐる物珍しさ。明らかにこれがお天道様の気まぐれではなく龍神の力であることが分かる。

久方ぶりに降り注ぐ雨に、街中はどこか忙しない。そこかしこで人々が慌ただしく何かしらを片づけている。それは洗濯物であつたり、農具であつたり、商売品であつたり。中には天に祈りを捧げてゐる人もいる。

人間たちが忙しなく動いてゐる一方で、妖たちも同じように浮足立つてゐるようだつた。雨が降り始めたことを喜び、龍神の力を崇め、龍神の訪れを歓迎してゐるようで、こそそこそ、と妖たちが嬉しそうに話し合つてゐるのが風に乗つて暁空にも聞こえてくる。

「まれ、そんなに跳ねないで」

「はーい」

隣を歩いているまれもどこか嬉しそうで、いつもより足取りが軽い。

それから十分ほど歩くと、童話専門書店が見えてくる。いつも通り門は閉じられてい

て、暁空が差していた傘をすばめる傍らでまれが門を開けた。門から書店のある玄関まではわずか数歩で、手で雨粒を防ぎながら少し駆け足になる。

玄関を開けると、いらつしやいませ、という店主の声が聞こえた。

「あれ、暁空じやん。どしたの？」

その店主を取り囲むように、暁空の見知った人たちがそこに立っていた。おかっぱと龍神である。

「おー、おかっぱじやん。いや、ちょっと店主さんに挨拶をね」

「挨拶？」

「店主さんに挨拶したらちゃんと君たちのところにも行くつもりだつたんだよ？」

暁空はそう言いながら店主を囲む輪の中に入つていく。

「いや、挨拶つて何の？」

おかげばが暁空に尋ねた。暁空は「いやー」と言いながら淡々とした口調で言つた。

「これから暫くここを発とうと思つて」

「え？」

「それはまた急じやな」

「今朝決めたからね」

突然の暁空の告白に龍神までもが目を丸くして驚く。しかし、暁空はその飄々とした

素振りを崩さないまま話し続けた。

「実家の妹の調子がよくないみたいでさ。様子見に帰るの。親もいないからさ、独りじや寂しいだろうし。というわけで、暫く姿見せなくなるけどそういうことだから心配しないでねっていう挨拶！」

にかつと暁空は笑う。そんな暁空をおかつぱは不気味なものを見たと言わんばかりに顔を引きつらせている。

「お、おう……お前も気をつけてな」

「分かってるよ。じやあね、おかっぱ。あ、私が戻ってきたときにはもう次の街に行つちやうとかある？」

「さあ。お前がどのくらいここを離れるか次第だと思うけど……ねえ？ 朝栄」

「そうじやな。ひと月はここにいようとは思うが、それ以上はまだ何とも言えんな」

「そつか」

おかげばと龍神の答えに暁空は頷いた。もうこれで二人と会うのは最後かもしけない。そう思いながら唾を飲み、息を吸つて笑顔を作る。

「あ、そうだ、思い出した。龍神様の力つて凄いね、ほんとに雨降つてる」

「そう言つたときだつた。

「え、あの、龍神様……？」

龍神が暁空を抱きしめていた。しかしそれも束の間、暁空の慌てようを見てすぐに龍神は暁空を離した。

「お前の笑い顔は太陽のようじや。妹御もさぞかしお前に救われることじやろう」
龍神は暁空の頭を撫で、微笑みかける。

「もしあ前が戻るとき、わしらがここにおらずとも、きっとまたどこかで会えるじやろうて。同じ旅仲間ならな」

「……うん、そうだね」

「達者でな」

「……うん」

龍神と暁空が握手を交わす。そのとき、おかっぱが暁空にお守り袋を差し出した。

「これあげるよ」

「え、何これ？」

「絆」

「は？」

「まあ、持つといでよ。お守りだと思つてさ」

半ば押しつけるようにしておかっぱは暁空にそのお守り袋を握らせる。暁空は渋々そのお守り袋を受け取り、背負っている荷籠の中に入れた。

「店主さん」

「寂しいですね、暁空さんがここを離れるだなんて」

「いつかは戻つてくるから。だからさ、あれ、集めるのやめないでもらえないかな?」

「分かりました」

一年前から暁空が探している本のお取り寄せ。暁空はそれをしつかり店主に頼み、じゃあ、と言つた。

「皆、元気でね」

「お前もな」

「じゃあね」

手を振り、店主たちに別れを告げる。踵を翻し、店の戸に手を掛けた。

戸を開けると、まだ雨はぱらぱらと降り続けていた。暁空は傘を差し、まれを隣に呼ぶ。まれは暁空に呼ばれ、いつものように暁空の腕にひつついた。そして、二人は歩きだす。

「空ちゃん、どうしたの?」

まれは暁空の顔を下から覗きこもうとする。しかし、その瞬間暁空はまれから顔を背けた。

「ねえ、空ちゃん? どうしたの? 泣いてるの?」

「泣いてない」

「悲しいの？」

「悲しくない」

「空ちゃん？」

「大丈夫、大丈夫だから」

まるで自分に言い聞かせるように。暁空はそう呟いて顔を上げた。

「行こう、まれ。今日中に吾妻咲に行つてしまいたいから」

「うん……」

暁空の実家のある美波間よしはまに行くには時間が足りない。夜になれば活発化する妖も増える。妖の被害を受けないためにも、美波間に行くまでの土地で一度夜が明けるのを待つ必要があつた。

雨の中、二人は吾妻咲を目指して歩き続けた。その間、まれはなんとか暁空を元気づけようとしたが、吾妻咲の宿に到着しても暁空は依然元気のないままだつた。結局、その日暁空がいつものように笑うことがないまま二人は床について夜を過ごすこととなつた。